

先輩、後輩の別はきちんとしていました。

上海乗船は、昭和二十一年六月十三日で、その日のうちに出帆と記憶しています。九州、長崎県の佐世保着、検便を半分くらいの人にしましたが、この部隊は患者なしで大丈夫となり、途中で止め下船しました。引揚げの在留邦人は婦人、子供がいたので検査を続けていました。

部隊は復員、解散となり、臨時の復員列車で、福島郡山駅に着いたのは夜でした。お陰で家も家族も大丈夫、生還を喜び合うことができましたが、私より後に出征した兄は、昭和十八年中支湖南省で戦死をしていました。

私の部隊は支那派遣軍の戦闘専門の第一線部隊のこゝととて、沢山の戦没者を出しています。特に我々の年次の兵隊は、大東亜戦の主力の兵隊でしたが犠牲は多いのです。私は、時々申しましたように将校や軍医の伝令、本部医務室勤務などのため幸運にも、満四年半の軍務を完うし生還できました。

## 第十一軍直通信隊

### 湘桂作戦 陰の戦歴

広島県 松木 正

私は大正十三年五月三十日、広島県賀茂郡大和町に生を受け、事情あつて父母は私が三歳のとき、協議離婚し、祖父母に育てられて成長した姉と私でした。家は農家で、九六アールの水田と二アールの畑で生計は楽ではなかったようです。しかも貧しい中での中学校（旧制）進学は、祖父母に相当の負担をかけ、遊ぶ余裕のない日々で農業、家事の手伝いをさせられたものです。

昭和十二年、中国との紛争に始まる戦争態勢は急を告げ、平和な農村にも若者の現役入営、召集令状による出征兵士の見送り、また戦死者の公報とともに遺骨を迎える村人の表情を見て子供心にも物悲しさを覚えておりました。

一方、私たち少年にも戦意昂揚のため、軍事教練が課せられ、配属将校より陸海軍生徒に応募するよう、機会あるごとに督励される日が続きました。戦時一色の時の流れは分別幼稚な少年の心を揺り動かされるものがあり、滅死奉公の気運は高まり、ついに祖父母を口説き、昭和十五年十二月（十六歳）神奈川県高座郡大野村、陸軍通信学校第八期生（少年通信兵）として入校しました。以後、軍通信、師団通信、機甲通信としてそれぞれ二カ年の修業期間後、昭和十七年十一月十四日（十八歳）同校卒業、同日陸軍兵長の階級を与えられ、支那漢口に駐屯する電信第十三連隊に同期生十一名とともに配属を命ぜられました。在校中は月四円の手当が支給され、親元よりの援助は不用で、休暇帰郷の際に、旅費の負担をお願いしました。

出征まで時間の余裕があり、完全軍装に身を包み、郷里に立ち寄り、祖父母と水入らずの一時を過ごしました。当時、祖父は六十三歳、祖母は五十八歳で、血気旺盛な若者も別離の情耐え難く、後ろ髪を引かれる思いでした。

十一月十八日早朝、近隣の皆さんの盛大な見送りを受け、集結地下関へ向かう。同日夕方、下関港に一同打ち揃って乗船を待つ間、いつの間にか周囲に人垣ができ、だれが歌い出すともなく、始まったのが「暁に祈る」の歌でした。共に大声で歌いました。出征する兵士も、銃後の国民も皆心を一ツにした時代でした。

感激を胸に、決意を新たに、関釜連絡船に乗り込み大陸に向かったのです。釜山上陸後は鉄道を利用し、満州回りで十一月二十日山海関經由で支那に入りました。途中車窓に映る広漠たる冬枯れの大平原、あるいは点々とある農村風景など、征途にある身ながら旅愁を感じたものでした。南京に到着後便船を待ち、揚子江を溯航し漢口に向かう。その大河の広さ、どこまでも続くその長さ、洋々たる流れに千古の歴史を感じ、大陸の広さに目を見張る思いでした。流域に沿って各所に見える農村風景は長閑で、古い塔の下で草を食む水牛、どこで戦争をしているのか疑うほどでした。

十二月五日、目的地漢口港着、前もって連絡した迎えのトラックに乗り市の郊外にある漢水兵舎に到着、

電信第十三連隊第五中隊長に申告後、各班に配属される。我々は任官するまでは準軍人の扱いで、指導を受ける身分です。指導教官は水野茂門少尉（陸士五十五期、元陸上幕僚長、現参議院議員）で、その取り計らいで、同期生の自習のため別に一室を与えられ、学習に、実戦実務に余念のない毎日が続きました。当初の任務は、初年兵教育、幹部候補生教育に携わる、何分にも短期教育です。重点的に「気力、体力の充実」で、実戦に出て直ちに役立つ通信兵の育成が主眼でした。

日が経つに従い教育内容を理解し、行動に機敏となり、兵隊らしくなってくるのが嬉しかったものです。初年兵は駐屯地でも作戦行動中でも雑用が多く、体力気力回復のため、時折楽な別用を申し付け、気分転換を図らせていました。教育後期中、作戦要員として前線に出発することになりました。

作戦要員として、第四〇師団（鯨）に配属の軍無線小隊の一員として参加することになりました。小隊長は伊藤少尉、分隊長は岸本軍曹でした。この江北作戦が私の初陣であったのです。今まで銃弾音を聞いたの

は学校での射撃訓練の時だけでした。行軍を開始して何日目か、ピューピューの弾音に思わず首が竦む。後から続いていた都田上等兵から、笑いながら「あの音は大丈夫だ、気を付ける音はプシユ、プシユの至近弾ですよ」と教えられました。矢張ピュン、ピュンは気になり、馴れるまでしばらく時間がかかりました。

この作戦は山岳戦で、峰あり谷ありで体力の消耗が激しく、厳しい行軍の連続でしたが、若い故か体力には自信があり、通信機扱いにも馴れているので苦にはならなかったのですが、虱には閉口しました。下着の縫い目の至る所に、列をつくって卵を産み付け、白い奴が隠れている、暇な時には虱退治に取り掛かるのですが全滅させることはできませんでした。

作戦中の宿営地では床に藁を敷き、余りを頭から被って寝るのですが、これが案外暖かく、疲れ切った体に、心地良い睡眠を与えてくれるのでした。

#### ―陸海軍協力作戦―

江南作戦中に「揚子江啓開作戦」というのがありま

した。これは揚子江の輸送力の強化と敵の退路遮断が目的であつて、期間は六〇日間でした。我々は陸海軍間の連絡のため「三号甲無線機」を携行し、海軍第一遺艦隊所屬の砲艦に乗り組みました。艦上ではあまりにも空界は良好で、距離は離れていても、三号機で十分通信は確保できました。海軍側は流木、破船の処理や、機電の爆破作業に忙しい毎日ですが、我々は与えられた一室に通信所を開設し、定時交信することでした。食事は万事船の炊事方で作ってくれるので、心配はない。海軍の給与は特に良く作戦終了時には全員丸々と太つて無事帰隊しました。

― 参謀よりお叱り頂戴 ―

常徳作戦参加中の昭和十八年九月、伍長に任官しました。晴れて一人前の軍人になったわけです。この作戦には小隊長・平田見習士官、分隊長は私で参加しました。作戦の進行につれて戦況は思わしくなく、連日の強行軍で全員額を出す寸前でした。器材分隊は、分隊員の装具をチャン馬（中国産の小さい馬）二頭に括

り付け、我々は銃を逆手に担いで行軍中、司令部が行するので、道を空ける、との伝令があり、空けた所を参謀が通りかかり、我々を見て、

「その部隊、軍規がなつたらん、部隊名を名乗れ」  
「ハイツ軍通であります」

このときは、このままで済みましたが、宿営地で通信所を開設中、司令部の通信将校が来られ、「参謀よきつにお叱りを受けた。指導せよ、の命令を受けてきた」と言われ、一瞬昼間の状況を思い返し、言葉もない状況でした。「とは言うものの、まあ要領よくやつてくれ、貴公たちは通信確保が任務だ。体力維持も大切だから、仕方のない面もある」と至つて碎けた態度で言われ、こちらも恐縮しました。しかし、その後も相変わらずの格好で行軍は続きました。三八式騎兵銃は、床尾と銃身のバランスが悪く、正規に担ぐと腕に重量がかかり、疲れるのです。

この作戦の後半のことでした。戦況は我が軍の思うごとく進展せず、師団司令部も苛立っている気配が我々にも伝わってきます。いつものことですが、司令

部は通信所が近くにあると、敵の電波探知機で司令部の所在を察知される恐れがある、との理由で離れた場所に開設していたのです。しかし、その夜は外壁のある広い民家を利用したのですが混信・雑音が多く、また電報も輻湊してしまいましたので、かなりの時間を要してようやく任務が終わったのです。そしてローソクを消しかけたとき、突如四方からの銃撃を受けました。

発動機音で敵の接近する気配に気付かなかったのです。

敵は我が方を目掛けて撃ってくる。直ちに全員外壁まで出て応戦するが、我々の小銃音だけを甘く見たか、ますます猛射してくる。万一の事を考えて小隊長は暗号書と水晶片を持った。敵は次第に果敢に接近し、手榴弾を投げてくる。一瞬我々もこれで終わりか……と思いつつ、無我夢中で銃を撃つ。その内銃撃音に気付いた司令部援護隊が救援に駆けつけてくれ、共に銃撃を加えて敵を撃退させました。幸い一兵、一馬の損傷もなく、その夜から衛兵を立てることにしました。戦い終わったその夜は、故郷の山河と祖父母の面影が脳裏からなかなか消えませんでした。

昭和十九年四月ころより湘桂作戦のため、各部隊の移動、集結が始まりました。この作戦は従来の局地作戦と異なり、今までの警備地区、武漢周辺を第三四軍に引き渡し、第十一軍は南支方面への進攻作戦で、軍の兵力は、三六万とも、閩連支援部隊を含めると五二万とも言われていました。この作戦に参加する第十一軍の主な兵団は、第三師団(幸)、第十三師団(鏡)、第三十四師団(椿)、第四十師団(鯨)、第五十八師団(広)、第六十八師団(松)、第一百十六師団(岩)、第二十七師団(光)、第三十七師団(冬)、第六十四師団(開)、これに第二十三軍下の第二十師団(原)、第一〇四師団(鳳)、独混第二十二旅団(節)、独混第二十三旅団(純)が参加していました。

このような大部隊の通信網を掌握するため第十一軍通信隊にも、新たに電信第五連隊、野電第八、第九、第十三中隊、電信第十二連隊第一中隊、独立有線一〇一中隊、独立無線第九三、第九四、第九五小隊が傘下に入りました。

昭和十九年五月二十七日を期し、第一目的地衡陽を

目指して大部隊は進攻を開始しました。中国の民衆は山奥に避難するのだが、抜き打ち進攻のため街には商品が取り残され、農家は農山物を放棄せざるを得ない。日本軍はこれらの物資を調達して進軍しました。私の所属する無線第五中隊は有線中隊と軍戦闘司令所内に合同通信所を設け、無線一個小隊をそれぞれの師団に配属を命じ、無線通信連絡の任に着かせました。

私は高木小隊の第二分隊長として、この作戦に参加しました。監利に待機する師団司令部に合流し、衡陽への中間都市「長沙」へ進軍しました。ちょうどそのころ、雨期だったため雨に悩まされました。毎日毎日、降る雨にぬれ、外套（かっぱ）も役に立たずの行軍でしたが、五、六日で衡陽郊外の所定の位置に到着しました。この衡陽の戦闘はさながら、生き地獄の様相を呈しました。戦闘の激しさもさることながら、飢餓との闘いでもありました。

敵、味方合わせて二〇万の将兵が、後方から物資の補給がない所で、何一つ生産しない戦いで、しかも食っていたのだから無理はないことなのですが、我々が

そこへ行ったところには、通常人の口に入る物は無く、携行した米もたちまち無くなってしまった状況でした。ちようどそのころ、稲田には水が張っており、ここにいる蛙、おたまじゃくし、糸みみず、蛇などを捕り、草花などと一緒炊いて食べる始末でしたが、それもすぐ材料不足となりました。

七月中旬になると、米がまだ余り実らない稲穂を手でしごき、一升瓶に入れ、棒で突いて米にして食べましたが、敵の制空権下では、このような作業は夜間に限られました。そのうち、背に腹は変えられぬと、農家から鎌を持ち出し、本格的な稲刈りとなり、ようやく飢餓状態から脱出しました。

敵兵も長期間の籠城で、食糧は欠乏状態とみえ、夜間になると敵、味方入り乱れての稲刈りが始まったのですが、不思議とその間は、銃声が止んでいました。地元の農民が丹精こめて育てた作物を、食べたのは敵味方の兵士で、申し訳ない次第でした。

衡陽攻撃は七月十一日の第二次攻撃で、失敗後は戦線は膠着状態といえ、八月四日、第三次攻撃が始

まりました。第五十八師団の精銳は三日間にわたつて猛攻を加え、六日には軍砲兵の十センチ加農砲、十五センチ榴弾砲の援護射撃のもと、市内に突入し、更に二日間の市街戦を展開、八月七日、ついに衡陽城は陥落しました。第一線部隊が死闘を繰り返す状況下で、軍戦闘司令部との電報送受信、連日不眠不休の作業が続きました。

師団司令部に続いて城内に入りました。城内は我が軍の重砲撃で街並みは崩壊し廢墟と化し、敵兵の死体があちらこちらで、死臭を放つなど、誠に慘憺たる状況でした。通信参謀の話では、敵の戦死者一万八千名だ、と小隊長から聞きました。敵の制空権下と、戦線が広範囲にわたるので、兵站線の確保が難かしく、兵器、弾薬の輸送が精一杯で、糧秣、衛生材料の補給が姿を消す中、第二期作戦が始まりました。

第一線兵団は第四十、第五十八、第六十八師団を中央に、第一百十六、第三十七師団は右翼に布陣し、八月二十九日に攻撃が開始されたのですが、敵は全面的に退却をし、南方に退いたので、追撃に移りました。こ

のときは三日三晩、不眠不休の追撃で、一日三回一時間ずつの大休止、その間に食事を作つて食べ、通信をする。時間がくると直ちに出發する。緊急電報があるときは、通信隊だけ残り通信を続行し、後から追尾とこの繰り返し毎日が続きました。夜行軍も歩きながら眠ることが度々あり、ときには逃げ遅れた敵兵が紛れ込むことがありました。

強行軍三日目の午後、敵戦闘機三機の波状攻撃を受けました。我が軍が飛行機目掛けて、砲、重軽機、小銃で応戦するが墜ちない。次は双胴のP38型爆撃機が来襲し、何百発かの落下傘爆弾を落されました。それが一度に落下傘を開き、ゆっくり落ちてくる。初めての体験なので、落下傘部隊かと疑ったのですが、地上に着くと、たちまち爆発し始めました。行軍列と離れた位置での爆発で、被害はなかったのですが、凄量の爆弾でした。この爆撃を教訓として、爾後器材分隊は、本隊とは離れた位置を進むこととなりました。

衡陽から全県にかけての地域では、中国人に流行していた赤痢、コレラが、日本兵にも伝染し、多数がこ

れに罹り悲惨な状態となりました。食糧難でカロリーの補給がつかず、栄養失調の兵士の多数が、下痢をしながら歩いていたのですが、特に怖いのが「コレラ」で、これに患ると一日で脱水状態となり、目が落ちくぼみ死んでしまう。赤痢は、暫く下痢が続くと、頬はそげ目がくぼみ、手足が細くなって、この世の人と思えぬ、幽鬼のような風体になり、そして歩行困難となり、坐り込んだが最後となります。

医薬品の無い我々には手のつけようがなく、ただ言葉で励ますだけに終わります。予防法として、農家にある石灰を頭からかけるくらいのもので、おてあげ状態でした。そのころ、この地帯には梨が熟れかけており、そんな生物は食わない、生水は飲まない、ことに注意しました。

このような苦しい進攻でしたが、我々の配属していた第五十八師団は、桂林の北方十キロ手前で停止し、次の攻撃の準備、弾薬の補給等に入りました。次の攻撃目標は「桂林」で、これには、第三十七、第四十、第五十八師団、戦車第三連隊が参加することになりま

した。このため、命令、連絡の電報が多かったものです。幸い待機場所が良かったのか、桂林市の郊外のためか、食糧が豊富で、久しぶりに肉や卵にありつきました。これにより隊員の血色も良くなり、元気が出たようでした。この待機中に軍曹に進級しましたが、階級章がないので、そのままでしたら、隊長がどこからか算段してくれました。

十一月八日、攻撃が始まる。桂林市を西南から、第三十七師団、東から第四十師団、北から第五十八師団が肉迫する。衡陽での敵の死守防衛にこりたのか、わざと包囲網の一方に穴を空けた格好になったのです。

桂林攻撃前後、米軍機の襲来が減ってきました。我々は「多分飛行基地が変わったのか、何もここだけが戦場ではない、敵にもいろいろ都合があるのだろう」と話合っていました。そのころから変わった日本軍の飛行機が、桂林市を爆撃し始めました。エンジンの音、掃射音が米軍機と変わらないので、司令部の通信係将校に聞いたら「新式の飛行機で、四式戦闘機（疾風）で敵味方の区別がつかないので、車両を出して飛ぶこ

とになつてゐる」とのこと、我々には嬉しくも、頼もしい限りでした。がこの飛行機も桂林陥落後は再会することはなかつたのです。

第五十八師団は北門から、戦車部隊の協力のもと、九日に突入し、十日には掃討を完了する。我々通信隊も司令部に追従し、市内に入る。市内には至る所に洞窟があり、これがすべて陣地化しており、抵抗の跡も生々しかった。師団の装甲車と戦車隊は、火焰放射器を使って掃討したとか、また歩兵部隊が煙でいぶしだしたとかの説があつたのですが、多分両方とも本当でしよう。

桂林が攻略された日、南方にある柳州も第三、第十三師団の猛攻で奪取しました。この後、第五十八師団はこの地区の、警備部隊となつたので、昭和十九年も押し迫つた十二月、軍無線高木小隊は配属を解かれ、一個分隊残し、柳州に進出していた中隊に引き揚げました。分隊に残つた私以下数名は洞窟の中に、通信所と居住区を設け、通信の任務に就きました。不足した受信用乾電池は、中国軍の放棄した蓄電池を代用し、

電波に指向性をもたせるため、逆LアンテナをWH型にし、物資不足の中をどうにか切り抜けたものです。

放棄された中国軍の軍服（新品）を非番の者は着用して、一着しかない自分の軍服を大切にしました。また市内の民家にあつた米国製のラジオを持ち帰り、修理して日本の短波放送を聞き、隊員は日本を懐かしんだ。虱退治に使つたドラム缶は風呂として使い、皆の疲れを癒してくれました。このように任務を遂行しながら、隊員には平穏な日が続いたのですが、私は心穏やかではなかつたのです。司令部の通信係将校から、師団の警備地区の治安が悪く、米式装備をした正規軍が動く気配がある。との情報を聞いていたのです。

三月に入ると、軍と師団を結ぶ有線回線が敵により切断される回数が増え、これを補修するため、出向いた有線中隊員に犠牲者が増えだしました。不通の場合には無線回線で、通信を確保するのですが、事故が重なるると不吉な予感がします。四月に入ると、柳州―桂林間の軍用公路に敵の出没が激しくなる。昭和二十年四月、衡陽に駐屯する第二〇軍が進攻作戦（芷江作戦）

を行い、大敗を喫しました。

湘桂反転作戦、伸びきった兵站線は、自動車、舟艇、列車いずれも米空軍の餌食となり、補給は完全に途絶えました。昭和二十年には、日本軍の占領地域に、米が実るあてもなく、軍は撤退することとなりました。まず前線部隊からと、第三、第十三師団が戦いながら撤退し、殿軍として第五十八師団が撤退することとなりました。

火器、兵力共に優勢な中国軍は、勢いに乗じて押し寄せ、包囲してくる。数カ月前の中国軍とは格段の違いを見せる。連合軍の武器の補給で、日本軍より射程の長い重火器を持ち、接近戦では自動小銃を使う、近代装備の部隊に変身しています。我が軍の航空兵力は皆無に等しく、手も足も出ない状況下の撤退だから第一線部隊には続々と、犠牲者が出る状況でした。

我々通信隊も、通信しながら、師団司令部に追従するのですが、司令部は包囲されるのを避けるため、移動が激しい。そのため遅れ勝ちとなり、時には第一線部隊と並列しての退却になることがありました。

全県に到着したとき、第五十八師団は、北上することとなり、我々無線隊は配属を解かれ、原隊に復帰するため、徒步行軍で無線第五中隊を追いしました。途中食糧難と悪路に悩まされましたが、幸い衡陽から軽列車が利用でき、八月十三日長沙で原隊に復帰しました。八月十五日夕方、通信所内は異様な雰囲気に包まれました。無線傍受で日本の敗戦を知るのでありますが、軍の発表でも通達でもないのが、半信半疑でした。翌日、敵機が低空で通過しましたが、爆撃も銃撃もすることなく、飛び去り、嫌な予感がしました。

#### ―終戦と抑留―

軽列車で八月二十日、岳州に着いたとき、終戦に關する詔書と、総司令官の訓示を聞きました。予期していたとはいえ、茫然自失の態でした。八月二十八日武昌に到着、この地で武装解除を受け、船舶で九江に集結。無線第五中隊は対岸の小池口に抑留され、復員を待つことになりました。小池口は揚子江沿岸地帯にあり、肥沃な土地に恵まれ、住民は素朴な人たちでした。

我々は壁の無い、藁屋根だけの三角形の住まいを造りました。我々はこの住まいを三角兵舎と呼んでいました。

九月以降、翌年の五月までの抑留生活が始まりました。十月から翌年三月まで私たち数名は、通信機の技術者として、南昌に向き、武装解除で中国軍が接收した通信機材の修理、補修に従事しました。扱い馴れた二号、三号甲を始め三号丙、五号、六号無線機、九五式電話機、九二式電話機、搬送電話機等で、中には今まで見たことも無い機材もあり、その上膨大な数でした。わずかな人数でどこまでやれるかわからなかったのですが、とにかく毎日点検、整備に従事しました。機材の取扱方法については、別に教育しているらしい。給与は中国軍より現物、紙幣の支給があり、困ることはありませんでした。

各機種ごとに整理し、感度、作動を確認し、多少機能が低下していても、作動すれば完了です。春になると九江地区の内地送還の噂もあり、それを気にしながら仕事を急いだものです。一応全機種の整備が終わり、

小池口の中隊に帰りました。

小池口の三角兵舎にも、懐かしい思い出があります。時々近郊の農家に出掛け作業の手伝いをし、その後、食事の御馳走になるのが楽しみで、また帰りに野菜をもらって帰り、皆で副食の補充にしたりで、大変助かったものです。近くの農民から「君には親はいるか、兄弟はいるか」と尋ねられ、「両親、兄弟もいる」と答えると「早く日本に帰って親孝行しなさい」と言われたりしました。

戦いに敗れた日本の兵隊として、そんなに卑屈を感じることもなく、地元中国人の温かい態度が、復員までの期間を大過なく過ごすことができ、小池口の我々は恵まれていたと思います。

#### 一 復員

昭和二十一年五月十九日、馴染みになった部落の人たちに見送られながら、渡舟で九江へ。二十一日九江出発、南京まで下り、南京からは無蓋列車に乗せられ、二十五日上海に到着しました。中国政府が手配した倉

庫で、復員船の乗船順番を待つ。その間嫌な思いもしたこともありましたが、我々は捕虜の身であることを自覚せざるを得ませんでした。

六月十一日、朝から乗船開始。乗船前、連隊長斎藤勇大佐より訓辞がある。「私は後に残るが、諸氏たちのことは全部責任を持つから、何も心配することはない。父母、妻子の元に帰って、祖国日本の復興のため頑張ってもらいたい」との言葉に一同ジーンとなりました。復員船は旧駆逐艦「竹」で、内部を改造し二段に棚を作ったものでした。乗組員は旧海軍軍人で、我々が乗船すると「長い間ご苦勞様でした」と、我々は「よろしくお願いします」の返礼をしました。

六月十二日午後、佐世保港沖に停泊する。陸上に伝染病が発生しているため、上陸延期となったのです。祖国内地を目前にしながらか、足止めとは情けない、と涙する者もいました。皆思いは同じで、せめて日本の山が見られるのだ、新緑の山に囲まれた街を見ながら、自分を慰めました。

六月二十一日佐世保上陸、検疫後、相の浦旧海兵団

で復員手続を済ませ、各県別の復員名簿を受け取り、各々別れのあいさつを交わしながらの旅も、こみ上げてくる嬉しさのため、未知の人でも自然と懐かしさがわく。途中街の被害状況を眺め、本土も大変だったと思うとき、進攻中の長沙、衡陽、桂林の崩壊都市を想い浮かべ、戦争の悲惨さをつくづく感じました。

二十二日明け方四時、同行の戦友たちと広島駅下車、駅前立つ。中国で噂は聞いていたが、原爆投下の凄さにただ驚くばかりで、しばらく一同声もなく佇みました。広島駅構内に復員局の出先機関があり、復員手続を済ませ、お互いの健康と再会を誓い、別れを惜しみつつ故郷へ。

古里が近づくに連れ、子供のころから馴染んだ、山や川を見て「国破れて山河あり」の意を強くしました。農村はそのころ田植えの季節で、予告なしの帰宅に、祖父母は一瞬茫然としていました。「ただ今帰りました」と告げると、「よう帰ったのう」の一言で、双方顔が崩れました。

昭和十五年十二月から始まった軍隊生活も二十一年

六月で終わつたのです。その祖父も昭和三十二年に、祖母は昭和四十八年にそれぞれ他界し、今思えば随分苦勞をかけ、心配させたと反省しているところです。

その他 姉妹はなし  
ということ、頼りになる兄に後事を託して応召できました。

## 砲兵従軍記

兵庫県 川上亀市

私の軍歴の概要を述べます。  
昭和十四年 八月 三日 普通寺山砲連隊入隊

十月 七日 香川県坂出港出発

十月十七日 中支武昌上陸、湖北省東

私は昭和十四年八月三日、補充兵として香川県普通寺市、山砲第四十連隊留守部隊へ入隊しました。私の

南地区の警備討伐（部隊名古屋本部

応召当時の家庭の様子は、

隊）

（山砲一個連隊、歩兵一個中隊）

祖父 健在 農事に従事

十二月 一日 九宮山作戦参加

祖母 死去

昭和十五年 一月 一日 第二次陸水作戦参加

父 死去

四月 一日 第三次九宮山作戦参加

母 死去

四月二十九日 宜昌作戦参加

兄 健在 農業・林業に従事

十二月十一日 予南作戦参加

本人 新居浜市で会社員（印刷業）

昭和十六年 二月二十六日 藕塘作戦参加

兄嫁 健在

三月二十七日 西部第三十六部隊へ

弟 死去

転属のため武昌出発